



# 伝えたい記憶

— 戦後70年 —



「平和使節」に参加した生徒たち

- 牛久第一中学校…入村飛翔、恒吉夏季、富岡雅大、吉永明依、若林日菜
- 牛久第二中学校…荒井唯維、岡本美弥、吉田亜希
- 牛久第三中学校…阿民ハルーン、入谷絵美、宮澤北斗、永作唯、山田るか
- 下根中学校……池田連弥、大石七海、澤崎光輝、川上智、森谷香音、段塚柚香、水谷康平、福田耕太郎
- 牛久南中学校……河合萌恵、津脇岳馬、真木和泉、丸山燎

太平洋戦争終結から70年、戦争体験者が減り、戦争の記憶が風化するなか、過去から学び、次の世代に戦争の悲惨さと平和の尊さをどのように伝えていくべきでしょうか。

今回は、次代を担う若い世代・中学生が「平和使節」となり、市内の戦争体験者への訪問などを通じて学んだことの一部をご紹介します。

## 「平和使節」とは

命の尊さや平和について学ぶため、市内中学生を対象に希望者を募り、「平和使節」として広島市などへ派遣する事業です。今年参加したのは、中学生25人。各校の生徒は、7月から8月にかけて、広島市と市内在住の戦争体験者への訪問を行いました。



牛久第二中学校地区



本橋 積善さん (終戦時：10歳)  
本橋 まさ子さん (終戦時：8歳)

**積善さん** 奥野地区の戦死者は、百何十人もいました。1軒で何人も亡くなった家があり、私の家も3人戦死しています。昭和18年頃から牛久にも空襲が始まりました。空襲が起きると同時に、夜間、敵機に見つからないようにするため灯火統制が始まりました。空襲警報が鳴ると、すぐに防空壕に避難しました。

**まさ子さん** 戦前と戦後で大きく変わったのは、教育です。戦前の教科書で戦意高揚を促すような表現は、戦後墨で塗りつぶされ、「墨塗り教科書」を使用しました。また、戦後は教え方も民主的になり、叩かれたりするようなことも無くなりました。生活が豊かになるまで時間がかかり、昭和40年頃でも冬は出稼ぎをして生計を立てていました。

**積善さん** 全国では200万人以上の方が軍人に召集され、戦死しています。それから東京大空襲で10万人、広島の大原爆で10万人の計20万人、沖縄作戦で20万人、それから一般市民が50万人犠牲になった。そういう大きな戦争でした。

**生徒の声** 「戦争中の不便さ、大変さを、私たちは詳しく知らなかった」「戦争のことを詳しく知る機会はとても貴重で、よい体験になった」

たくさんの人が犠牲となった戦争でした

牛久第一中学校地区



藤田 静男さん (終戦時：小学生)  
石山 勇一さん (終戦時：20歳 兵役に従事)

**石山さん** 当時の日本は「徴兵制」がありました。20歳になると徴兵検査をすることになっていて、昭和19年頃は戦況が悪化していたので、皆、戦地に送られました。私は、水戸37部隊に配属され、中国の華北省に送られました。朝は零下15度のなか、訓練が行われました。実弾の飛び交う中の訓練だったので、負傷し日本に送還された仲間もいました。

終戦後は、捕虜となり2年間シベリアに抑留されました。シベリアでは、木の伐採などの肉体労働に従事させられました。シベリア抑留者は60万人ほどいましたが、何万人もの人が亡くなってしまった。亡くなった方のなかには、牛久出身者もいました。

**藤田さん** 牛久の小坂地区では、アメリカ戦闘機の機銃掃射で女の子が亡くなっています。女化地区に爆弾が落とされて、家屋が1軒全焼してしまったことがありました。ものすごい音で、自宅の裏に落ちたと錯覚するほどでした。「平和が一番」ですね。

**生徒の声** 「過去に目を向けなければ、平和は築くことはできない」「戦争に関わった人や場所と直接ふれ合ったことで、知っていた『戦争』は、ほんの一部に過ぎなかったことを実感した」

平和が一番ですね

## 下根中学校地区



飯岡 幹雄さん(終戦時：12歳)

当時、通っていた岡田農業学校では、勉強をするゆとりはなく、「勤労奉仕」という手伝いをしました。兵隊に行って働き手がない家に毎日手伝いに行かされ、勉強をやりたくてもできませんでした。当時は着物や食べ物など自給自足で、今のようにコンビニなどもないし、物を売っているところもありませんでした。また、思ったことを自由に言えない雰囲気でした。

当時の日本政府は、アジアの国々を欧米の植民地から解放するための戦いであると報道していました。「鬼畜米英」と教えられ、新聞などで戦果が知らされ、絶対に勝てると思っていたので、戦争が終わった(負けた)時は、呆然とした気持ちになりました。私の父はニューギニアで戦死しています。戦争の後に残るのは悲劇です。だから、本当に教育は肝心です。学生の時は善悪の判断がつくように、しっかり勉強しなければダメ。政治と教育で、(人間の考えは)どのようにもなってしまう。教育は、本当に重要です。

**生徒の声** 「戦争の事実を知るとともに、教育の意味、生きていることの幸せを教えてもらった」「戦争を知らないで済ませるのではなく、考えること、伝えることが大切だと思った」

## 善悪の判断がつくように、しっかり勉強しなければダメ

## 牛久第三中学校地区



小川 未太郎さん(終戦時：12歳)  
永島 秀恭さん(終戦時：11歳)

**永島さん** 戦争前は勉強するゆとりもありましたが、開戦後は「勤労奉仕」をさせられ、鉄砲の弾を作りました。戦時中は東京から茨城などへ4回引っ越しをしました。

**小川さん** 牛久では近所同士で助け合って何とか食べられる程度でした。

**永島さん** 当時は物資が不足し、赤ちゃんにあげるミルクもなく、代わりに米ぬかを煮たものをあげていました。食べ物は肉や魚はなく、ドジョウやタニシ、川魚、イナゴが主なタンパク源でした。米もなく主食は、イモ類やすいとん。娯楽もなく、殺伐とした雰囲気があり、隣村に行くと石を投げられたこともありました。

昭和20年3月10日の東京大空襲の日、風に乗って塵などが飛んできたのを覚えています。戦争が終わっても、生活は不便で大変でした。今は、戦争がないことが何より幸せであり、不自由がないことも幸せなことです。戦争は、2度と起こしてはいけません。

**生徒の声** 「戦争で命を亡くした人たちの分まで頑張って生きて、平和な世の中をつくりあげなくてはいけない」「悲惨な出来事が起こらないように、学んだことを伝えていきたい」

## 戦争がないことが何より幸せ 不自由がないことも幸せなこと

生徒たちは、市内の戦争体験者への訪問のほか、「平和使節」として7月29日から31日にかけて、広島市を訪問しました。原爆ドームや広島平和記念資料館の見学、被爆体験者講話などを通して、戦争の悲惨さ、平和と命の尊さなどについて考えを深めました。

そして、生徒たちは、11月28日、中央生涯学習センター文化ホールで行われる「平和の集い」で、今回「平和使節」として学んできたことを発表します。皆さんも、この機会に歴史を振り返り、平和のために、今、何をすべきかを考えてみませんか。

### 戦争の悲惨さと平和の尊さを伝えたい

#### 牛久南中学校地区



張替 浩さん (終戦時：8歳)  
秋田 セツ子さん (終戦時：13歳)

秋田さん 当時、通っていた小学校(現在の東洋大学附属牛久高校の場所)では、勉強よりも「勤労奉仕」が優先され、農作業をしていました。父親は戦死し、一家の働き手は母親が中心でした。

張替さん 特に記憶に残っていることは、昭和20年3月10日の東京大空襲です。夜の空襲で、風に乗って牛久まで火の粉が飛んできました。また、学校での教育です。素手で戦う方法を教わるなど愛国精神を植え付けられ、大人よりも子どもたちの方が戦争に染まっていたと思います。

秋田さん 戦後は、民主的な教育を受け、「手に職をつけ、自分のやりたい仕事をしたい」と考えて、縫製業(紳士服作り)をしました。

今は、みんな好きなだけ勉強ができて幸せです。中学生の皆さんに伝えたいことは、何事もすぐにやめてしまわずに、まずは目標を持ってやってみる。今は個人が尊重される世の中なので、自分の良さを生かしてほしいと思います。

生徒の声 「好きなことが自分の意志でできることのありがたみを知った」「いつか自分の子どもたちに『世界が平和か』と尋ねたときに、『平和だ』と答えてもらえる世界にしていきたい」

今は個人が尊重される世の中  
自分の良さを生かしてほしい

## 平和の集い

### 戦後70年

## 今、平和を考える

入場無料  
事前申込不要

◆第1部…平和使節団体験報告会

◆第2部…講演会

演題

混迷の時代を生きる  
“命の重さ”



講師 江川 紹子氏

テレビ、報道の場で活躍するジャーナリスト。国際情勢や国内の社会問題、教育問題、人権・平和などに関して、精力的に取材・執筆。

11/28 開場 午後1時  
開演 午後1時30分  
中央生涯学習センター文化ホール

◆対象 一般(未就学児は除く)

◆主催 牛久市教育委員会

問：中央生涯学習センター ☎871-2301